

第1学年 社会科学習指導案

1 単元名 「古代社会を支え、国の発展に貢献した人々」－遣唐使を考える－(東京書籍)

2 単元について

- 本単元については、社会科学習指導要領歴史的分野の内容(2)古代までの日本の学習として位置付ける。ここでは、大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後、天皇や貴族の政治が展開したことを「律令国家の確立に至るまでの経緯」、「摂関政治」の学習を通して理解させることをねらいとしている。

遣唐使については、唐の進んだ制度・文物の輸入を目的として派遣された使節である。630年から894年の間に18回の遣唐使任命があり、そのうち実際に渡航したのは15回(数え方に諸説あり)といわれている。役人、留学生、学問僧として阿倍仲麻呂、吉備真備、最澄、空海などがおり、様々な経緯を経て、894年菅原道真の建議により中止された。航海には、造船技術の未熟さや航海の危険が伴い、後期には航路の変更により、実に30%が遭難したといわれ、遣唐使は生きて帰れる保障さえなかった。このように過酷な状況の中、遣唐使は世界で最も進んだ文化を習得・輸入し、国の発展に大きく貢献した。

遣唐使についての学習では、唐の制度や文物を学ぶ価値、様々な人々の立場や観点から歴史的な事実を見つめさせることができる題材だと考える。将来、社会の形成者として生活する生徒たちには、社会的事象について様々な立場や観点から考え、理由をもって公正に判断し自分の考えをもつことができるようにすることが必要である。歴史的事象の内容を十分に理解させ、どのような価値を重要と判断するのか多角的に考察し、表現する力を育成する上で十分意義があるテーマだと考える。

- 本単元の内容は小学校で既習の内容である。「聖武天皇は、中国(唐)へ使者(遣唐使)や留学生を送り、皇帝中心の政治の仕組みや文化を学ばせました。」(東京書籍新しい社会6上)とあり、生徒は遣隋使に引き続き、国づくりのために新しい制度や文化、学問を取り入れたことを学んでいる。

本学級の生徒は、小学校時の既習内容を生かし、歴史的分野の授業に積極的に臨んでおり、挙手をして発表する生徒も多く見られる。確定している事実の発表は意欲的に行うが、自分の意見を発表することを難しく感じ、発言できない傾向が見られる。その理由として、2つのことが考えられる。1つ目は、自分の意見を述べる場合に恥ずかしさが先に立ってしまうこと、2つ目は、意見のもちかたや判断の仕方や発表の方法が分からないことである。自分なりの考えをもち、意見を述べるという活動や話し合い活動を経験させる必要がある。そのためには、意見発表や話し合いの前に自分の考えをしっかりとめさせるところに十分な手立てを取っていく必要性を感じている。

- 指導に当たっては、遣唐使派遣に関して意思決定型の場面を取り入れた授業を仕組みたい。意思決定を行うには、今までの学習内容に加え、様々な資料を活用し自分の考えの根拠としていく必要があるが、様々な立場(考え方)や観点を意識させ判断させることにより、判断の過程を重視して指導を進めたい。さらに、友達の意見を聞くことは、自分とは異なる考えや立場があることを認識し、自分の意見の脆弱さや視野の狭さに気付き自分の意見を鍛えることにもつながると考える。

学習過程においては、古代の国家の歩みを東アジア世界とのつながりと関わらせて学習を進める。日本の国づくりにおいて、古代国家の統治に必要な制度や文物は、その多くが隋や唐からもたらされたものであり、強い影響を受けていることを理解させる。また、古代の文化を担った人々として、天皇、貴族、遣唐使などにも着目させ、古代国家における文化の広がりや深まりについても理解させたい。

その際、必要な資料を活用して、自分の考えをまとめさせ、分かりやすく効果的に表現する力を

育てたいと考える。また、自分の考えを決定し述べる学習を通して、複数の社会的事象に関する解決策の中から理由付けを行い、判断する力を育成したいと考える。

3 単元の目標

- (1) 律令制度や摂関政治の仕組みが整い、天皇や貴族の政治が展開されたことに課題意識をもたせ、国際的な要素をもった文化が後に国風化したことを意欲的に追究させる。
- (2) 律令国家のねらいについて、その特色に課題意識をもち、複数の立場や観点から考え、自分の言葉で表現させるとともに、仏教の影響や文化を担った人々などに着目し、古代の日本において栄えた文化の特色について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現させる。
- (3) 律令制度や摂関政治などの天皇・貴族の政治、法隆寺や正倉院の宝物、仮名文字などについて、様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりさせる。
- (4) 律令制度や摂関政治の仕組みが整い、天皇や貴族の政治が展開されたことや国際的な要素をもった文化が後に国風化することなどの特色を理解させ、その知識を身に付けさせる。

4 評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度【関】	社会的な 思考・判断・表現【思】	資料活用の 技能【技】	社会的事象についての 知識・理解【知】
○律令制度や摂関政治の仕組みが整い、天皇や貴族の政治が展開されたことに課題意識をもって追究しようとする。 ○国際的な要素をもった文化が後に国風化したことに関心を持ち、意欲的に追究し、古代までの文化遺産を尊重しようとする。	○律令国家のねらいについて、その特色に課題意識をもち、複数の立場や観点から考え、自分の言葉で表現している。 ○仏教の影響や文化を担った人々などに着目し、古代の日本において栄えた文化の特色について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	○律令制度や摂関政治など天皇・貴族の政治についての様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。 ○法隆寺や正倉院の宝物、仮名文字など様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	○律令制度や摂関政治の仕組みが整い、天皇や貴族の政治が展開されたことを理解し、その知識を身に付けている。 ○国際的な要素をもった文化が後に国風化するなどの特色を理解し、その知識を身に付けている。

5 単元計画（全8時間 本時6/8）

過程	主な学習活動(○)	教師の働き掛け(○)	【主な評価】(・)	時配
学習問題を	○聖徳太子が朝鮮・中国から学んだことを生かし政治を行ったことを、資料から読み取る。 ○飛鳥文化と朝鮮・中国	○聖徳太子の行った政治について理解させ、朝鮮や中国の影響を受けていることに気付かせる。 ○飛鳥文化と朝鮮や中国の仏像を比較	・聖徳太子の政治の目的について考察し、朝鮮や中国の影響を受けていることに気付き、適	1

つ か む	の文化との関わりを調べ、学習問題を考える。	させ、飛鳥文化が仏教文化と大陸文化の影響を受けていることに気付かせ、学習問題を設定する。	切に表現している。 【思】	
古代までの日本は、朝鮮や中国との関係がどのように影響しているのだろう		《学習問題Ⅰ》		
調 べ る	○大化の改新から律令国家の確立に至るまでのあらましを理解する。	○大化の改新で行われていた政治が、朝鮮や中国の影響を受けながらどのように整えられていったかを、小学校での学習に付加させながら理解させる。	・大化の改新から律令国家の確立に至るまでの経過を表にまとめている。 【技】	1
	○大宝律令と古代国家の仕組みを理解する。 ○唐の影響について考える。	○律令の制定、都の造営、地方への支配の広がりなど、唐の影響で日本の律令国家が整えられていったということを資料から読み取らせ、整理させる。	・天皇、貴族の力の大きさや中国の影響について理解し、その知識を身に付けている。 【知】	1
	○班田収授法の内容や仕組み、奈良時代の人々の生活の様子を資料を通して理解する。	○班田収授法についてまとめさせ、貴族や農民の生活、土地制度について理解させる。	・口分田が不足した結果、土地制度が変化したことを理解し、その知識を身に付けている。 【知】	1
	○正倉院の宝物と朝鮮・中国に現存する宝物との関連性を調べ、遣隋使や遣唐使の派遣が文化に与えた影響を考える。 ○平安京遷都後の政治の様子を、教科書の内容から読み取る。	○天平文化は仏教と唐の影響を強く受けていることを正倉院や東アジアにある代表的な文化遺産を通して理解させる。 ○平安京に都が移った経緯やそこで行われた政治の内容を歴史的背景と関連付けて理解させる。	・天平文化が仏教や大陸の文化の影響を受けていること理解している。 【知】 ・平安時代の政治や文化の特色をまとめている。 【技】	1
考 え ・	○遣唐使の果たした役割や意義を理解する。 ○遣唐使を続けることのマイナス面について考える。	○遣唐使の果たした役割を理解させる。 ○遣唐使の停止の理由について考えさせる。 ○遣唐使関係の補助資料を提示し、多面的に考えさせる。	・遣唐使の停止について考えたことを自分の言葉でまとめ表現している。 【思】	1 本 時 (6/8)
論題 遣唐使を停止してよかったのかどうか考えよう。 《学習問題Ⅱ》				
ま と め る	○遣唐使の停止についての自分の考えを論述する。	○既習内容や関係資料を基にして、遣唐使の停止についての意見をまとめさせる。 ○友達の意見を参考にして自分の考えを深めさせる。	・遣唐使の派遣について自分の考えを根拠を明らかにして考察し、その過程や結果を適切に	1

	○話し合い前後の考えの変化を記録させる。	表現している。 【思】	
○藤原氏が勢力を伸長する様子を知る。 ○遣唐使の廃止が国家や社会に与えた影響を考える。	○摂関政治について調べさせ、藤原氏が天皇の外戚となり勢力を伸ばしたことや国風文化の特色を理解させる。	・国風文化について代表的な事物を基にその特色を理解している。 【知】	1

6 本時の目標

遣唐使が果たした役割を理解し、遣唐使が果たした役割と遣唐使を続けることのマイナス面を考えることを通して、遣唐使の停止についての考えを自分の言葉で表現することができる。

7 展開(全8時間 本時6/8)

学 習 活 動	教師の働き掛け(○)と評価【】
1 学習のめあてを確認する。	○遣唐使によって伝えられたことや学んだこと、遣唐使を続けることのマイナス面の両面から、話し合いに対する意欲をもたせる。
めあて 遣唐使が果たした役割を考えよう。	
2 遣唐使が伝えたものや、来日した人について理解する。 ・平城京 ・政治の仕組み ・税制 ・仏教(最澄・空海) ・天平文化 ・珍しい文物(ヨーロッパ等からも) ・鑑真 など	○遣唐使はいつから、何回くらい派遣されたか、また、唐から伝えられたものや学んだことを、映像や資料集等を基に確認させる。 ○遣唐使はたくさんの苦労や犠牲を払いながら、唐の政治制度や文物、唐に伝えられたヨーロッパの文化などを日本に伝えたことを確認する。
3 鑑真の来日について知る。	○鑑真は唐から5回の航海の失敗と12年の歳月を掛けて苦労の末に来日し、我が国の仏教と学問の発展に尽くしたことを映像で見せ、理解させる。
4 遣唐使を続けることのマイナス面を考える。 ・唐への航海はとても危険だった。 ・造船、航海技術が未熟だった。 ・命の危険があった。(航海, 上陸後) ・唐の国力が衰えつつあった。 ・新羅との関係が悪くなっていた。 ・文化やもの、仏教など大切なことをすでにたくさん学んでいた。 ・唐や新羅の船が日本に来るようになり、こちらから向かう必要がなかった。	○本時までの学習で、主に遣唐使の意義や役割(プラス面)にスポットを当ててきた。ここでは、遣唐使の派遣を続けることのマイナス面にも注目させ、関心をもたせる。 ○菅原道真の進言(資料)を読ませる。唐の国力が衰退していること、航海の危険について書かれていることを読み取らせる。 ○日本と中国、ヨーロッパとのつながりも視野に入れられるように、これまでの学習を振り返らせる。 ○遣唐使の意義や役割(プラス面)と続けることのマイナス面を比較させることで、「遣唐使を停止してよかったのかどうか」という問いを導き出し、自分の考えを決めさせる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 社会的な問題(研究や論争となる事件) 遣唐使を停止したこと </div>	

5 遣唐使について意思決定1を行う。	○本時の学習を終えた時点での意思決定を行わせる。
6 今日の学習を振り返る。	○生徒それぞれの意思決定を賛成・どちらかといえば賛成・どちらかといえば反対・反対に分け、考えを交流させる。これにより、考えの違いを基に論題を導き出す。
論題 遣唐使は停止してよかったのかどうか考えよう。 《学習問題Ⅱ》	
7 次時の予告をする。	○遣唐使の停止について自分の考えをまとめる時間であることを伝える。

8 本時の評価

単元の評価規準	律令国家のねらいについて、その特色に課題意識をもち、複数の立場や観点から考え、自分の言葉で表現させるとともに、仏教の影響や文化を担った人々などに着目し、古代の日本において栄えた文化の特色について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができる。 (社会的な思考・判断・表現)		
本時の評価規準	遣唐使が果たした役割を理解し、遣唐使が果たした役割と遣唐使を続けることのマイナス面を考えることを通して、遣唐使の停止についての考えを自分の言葉で表現することができる。 (社会的な思考・判断・表現)		
判定基準 (判断のめやす)	「十分満足できる」状況(A)	「おおむね満足できる」状況(B)	「努力を要する」状況(C)
	遣唐使の派遣や派遣の停止について自分で調べたことや資料などから多角的に理解し、根拠を明確にして自分の考えを述べている。	遣唐使の派遣について、プラス面とマイナス面の両面があることを理解し、自分の考えを述べている。	(B)に達していない児童
→(B), (C)と判断した生徒への支援策		→歴史的事象は多面的に見ることができ、自分の意見の理由を明確にしていくことを説明し、補足を促す。	→遣唐使にはプラス面、マイナス面の両面があったことを補足説明し、意思決定に向かわせる。
評価方法	ワークシートの記述・発表内容		